

PDF  
同梱

ノベル付CG17枚+  
文字無差分16枚入り!

激エロ!!

# 雪女対倩兮女

ふたなりショートノベルCG集

# 激工口!!

## 女傭情対女傭情

午後9時、オレは残業を終え、帰路についていた。近所の公園を通っていた時のことだった。一人の女が声をかけてきた。「ケラケラ、貴様がお前殿か？」そこには桃色の着物を纏った長い黒髪の女がいた。常にケラケラ笑っており少々不気味であった。「そ…そうですけど」

「ケラケラ、そうか、ならば死んでもらおう！」

「素晴らしい放つと女の周りから無数の剃刀のような刃が飛んできた。壁のような何かが地面から生えてきた。それは氷の壁だった。」

「ひっ…!?!」

殺される！剃刀が眼前に迫ろうとしたとき、それを遮るように壁のような何かが地面から生えてきた。それは氷の壁だった。

「そこまでじゃ！ケラ子！」

「ケラケラ、来たな、美冷！」

空を舞っていた美冷さんが傍に降り立つとオレは彼女の後ろに隠れた。

「み…美冷さん！この人一体…!?!」

「この女は傭女(ケラケラおんな)のケラ子。」

笑い女などとも呼ばれておる悪の妖怪じゃ。」

「ご紹介に与り、わしはケラ子じゃ。お前殿、貴様を頂きに来た。」

「えーっ!?!」

「なんじゃと!?お前殿は我のものじゃ！お前のような女に渡すものか！」

「そう来ると思っておったわ、ならばこれで勝負じゃ!!」

「そういうとケラ子はタイトの股間部分を破り去った。」

そこには半勃起のチンポがあった。

「け…ケラ子さんもふたなり!?!」

「良かるう…ならば我が勝つたら二度とお前殿に近づくとは許さん！」

「フフフッ、勝負じゃ！美冷！」

こうして「大妖怪によるエッチな激闘が幕を開けた……」



「ケラケラ…まずは再会を祝してこれで勝負じゃ！」  
そう言い放つとケラ子は瞬時に美冷さんの間合いに入り、  
美冷さんのチンポに自身のチンポを擦り付けた。

兜合わせだ！

「んっ…♡この妖気に満ちたチンポ…！相変わらず禍々しくスケベじゃ…！」

「あんっ…♡美冷のチンポも相変わらずひんやりしてて気持ちよいぞ…♡！」

半勃起チンポをクニクニ、スリスリと擦り合わせているうちに彼女たちの  
チンポはビンビンに勃起していった。



「はっ…♡はあっ…♡ビンビンじゃな、美冷♡」

「おぬしこそ…♡あんっ…あっ…♡」

「ビンビンになったチンポを重ね合わせて二人の手でホールを作って扱き合ったり、先っぽ同士をチュッチュさせていると、みるみる先っぽからスケベな汁があふれ出てきた。」

「あっ…♡すごい…♡美冷の先走り…♡」

「んうっ…♡こ、こんな女とチンポを合わせて濡れてしまっとは…♡」

「ケラケラ、恥じる所がまたスケベ心をくすぐる♡」

「あんっ…♡よせ、そんなに先っぽ同士擦り合わせたら…♡」

「擦り合わせたら…?」



「で…でちやううっ♡  
「あんっ♡わしもお♡」

びゅっ!!!びゅるるるっ!!  
二人のチンポから大量の精液が耐えかねて爆発した。



「あっ……あっ……♡おぬしの負けじゃな、美鈴♡」

「ど、同時じゃ……今のは同時にイッたぞ!!」

「ケラケラケラ、いいじゃろう♡ここで勝っては面白くなら、

三番勝負と行こうではないか」

「よ、よし……いいじゃろう……あんっ……♡」

射精した直後の敏感になった亀頭同士を擦り付ける

ケラ子のチンポに圧倒された美鈴だった。



激しい手の応酬だった。互いにチンポを握らせまいと手をはたき落とし、体を殴り、拳速によるかまいたちにより服はボロボロに切り裂かれていた。二戦目は相互手コキ対決だ。

「ケラケラ、捕ったぞ!!」

「あっ……♡」

先にチンポをつかんだのはケラ子だった。

「くっ……♡おのれ……!!」  
遅れてチンポをつかむ美冷。二人ともあれだけの応酬をしてきたらチンポのチンポは萎えることなくピンピンだった。

「ケラケラ、スケベなイチモツじゃな♡ずーっとピンピンではなからか♡  
さてはわしに捕まれるのを待っておったな♡」

「ち……違う……♡んっ……おぬ♡こそピンピンではないか、ドスケベ女め♡」

「ケラケラ、言ってくれるのお♡」



お互いにチンポを扱き合っていると先っぽからまた多量の先走り液が溢れてきた。

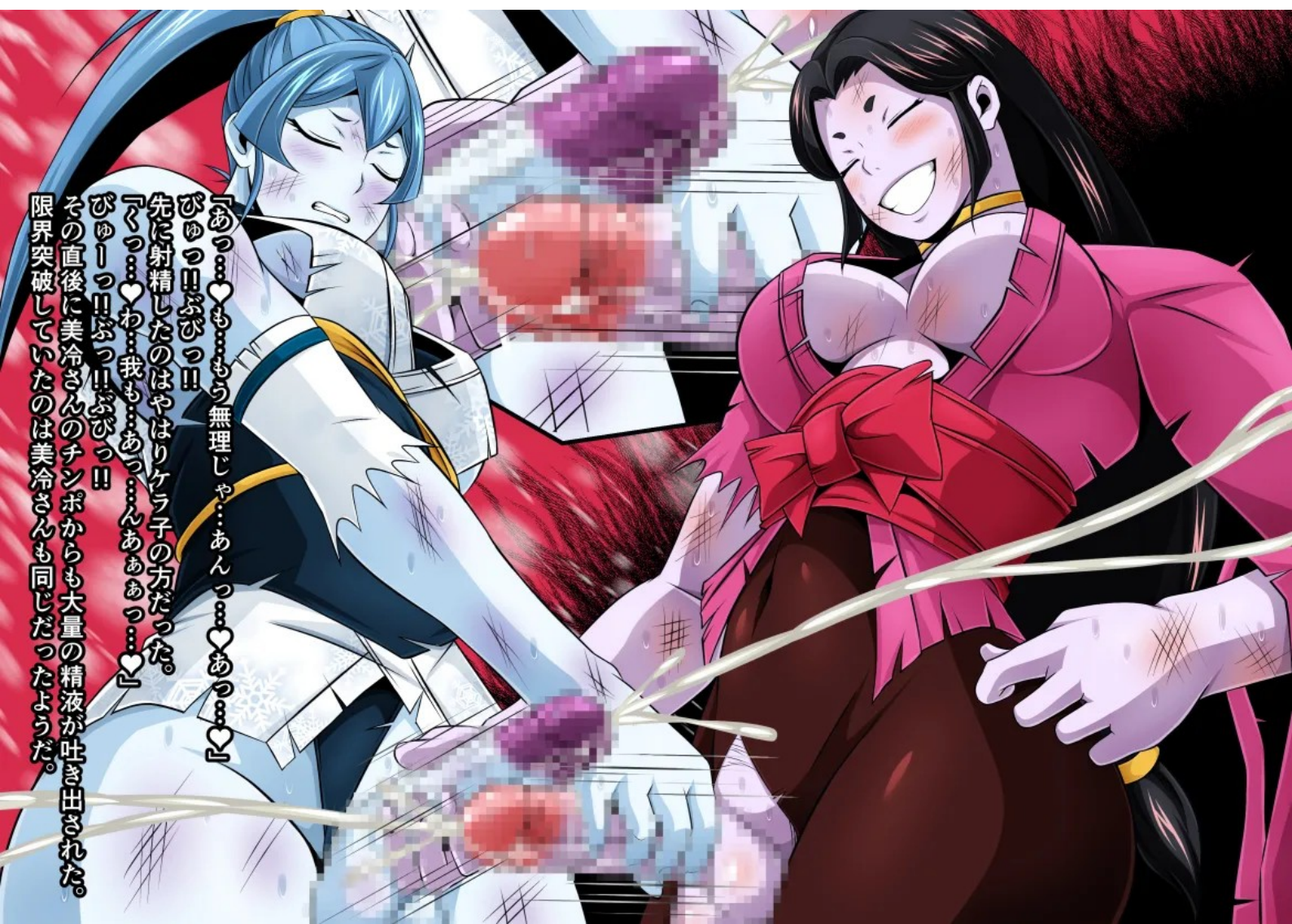
「あっ……♡すごいすごい、美冷、わしのガマン汁  
出ちゃってるチンポよく見てえ♡」

「くっ……♡そ……そんな言葉になど……♡」

「ケラケラ、そういつてる割にはチンポがもっと堅くなってるぞ♡  
わしに欲情したかあ♡」

「だっ……誰が……♡あんっ♡」

言葉とは裏腹にオレにはケラ子の方が限界が近いように見えた。  
挑発して美冷さんを先にイカせようという作戦だろうか。



「あーっ……♡も……もう無理じゃ……あんっ……♡あーっ……♡」  
「びゅっ!!ぶっびゅ!!」  
「先に射精したのはやはりケラ子の方だった。」  
「アッっ……♡わ……我も……あっ……んあ……あっ……♡」  
「びゅーっ!!ぶっびゅっ!!」  
その直後に美冷さんのチンポからも大量の精液が吐き出された。  
限界突破していたのは美冷さんも同じだったようだ。



「ケラケラ、これで「対」か…♡次で決着をつけてくれるわ♡  
」の…望むところじゃ！

『そのにやけ面二度と見せられんようにして〜れる』  
お互いのチャンポを硬く握り合い、  
最後の勝負にかける気合が垣間見えた。

「ケラケラ、最後の勝負はケツマンコを掘り合い、心が折れた方の負けじゃ♥」  
「よかるう、来るがよい…」  
そういうと美冷さんは側位の態勢でケラ子のチンポを受け入れた。  
先走りで濡れていたケラ子のチンポはぬりゅっと美冷さんのアナルに  
入っていった。





「ふっ…♡ふっ…♡どうじゃ？わしのチンポは？気持ち良からう♡」  
ケラ子の激しいピストン運動を何とか耐える美冷だった。  
前立腺を刺激され、かなりの快感だろう。だが、それでも耐えた。  
「お、おぬしのチンポなどなんとも…んっ…ないわ…♡あんっ…♡」  
「喘ぎ声が漏れておるわ♡なんともかわいいのお♡」  
「じ…冗談はよせ!!あっ…♡」  
その時ちらりとケラ子がかちらを見た。  
「ケラケラ、見る美冷、お前殿の股間を。あ奴お前が他のチンポで  
気持ちよくなるのを見て興奮しておるわ♡」  
「なっ…!ち…ちが…!!!」  
オレは慌てて反論した。しかしふたなり好きのオレのこの状況で  
勃起するなという方が無理な話だった。オレのチンポはガチガチに  
勃起してパンツの中はガマン汁でスルスルだった。

「そんな…!いや…見ないでお前殿!!!」  
美冷さんが目を伏せた。やはりこのNTR状況かなり恥ずかしかったか。  
「ケラケラ!締まる締まる♡恥ずかしすぎてケツマンコが締まりが  
一段と良くなったのお、美冷♡」  
「くっ…♡や、やめ…♡いやっ…♡お前殿見ないでえ…♡」



「んっ…♡んっ…♡そろそろイクぞ♡中に出しちゃうからのお♡」

「あっ♡あっ♡いやっ♡

あああああああっ!!」

「イクッ…♡」

ぶっ!!ぶりゅっ!!ぶびいっ!!

ケラ子の精液は美冷のアナルから噴き出るほどの量だった。  
それをアナルに受けるとトロロテン射精してしまう美冷。



「みっ…美冷さん…!!!」

美冷さんの目はうつろだった。

「ケラケラ、どうやらその勝負わしの勝ちのようじゃなあ♥」

「そ…そんな!!美冷さん!!!」

オレは美冷さんに駆け寄ろうとした。それをケラ子が遮る。

「さーて、わしの勝利じゃしお前殿には消えてもらおうかの」

指には剃刀が握られていた。こ…殺される…!?

そう思った時、ケラ子が変わった。

「ケラ!? み…美冷!? いつの間に…シっ…♡」  
美冷さんが背後からケラ子を羽交い絞めにし、チンポを挿入していた。

「フフッ、油断しおったな。策士策に溺れるとはこの事じゃな。」

「美冷さん!!」

「ケラケラ、ま、まさか演技だったのか…!？」

「その通り! おぬしの卑劣な戦い方は目に余る、

故にはおしも毒を持って毒を制したわけじゃ

さて、覚悟してもらおうぞ、ケラ子よ」

「あっ…ちよっ…チンポ握っちゃ…♡」

ゆらりと美冷さんの腰が動いた。



パンっ!!パンっ!!パンっ!!パンっ!!パンっ!!  
美冷さんの高速ピストンはとんでもない音を奏でていた。

「あっ♡ひっ♡しゅごい♡ケツマンコ壊れちゃう♡」

「ホレホレ、お前殿にキンタマの裏もおまんこも見えるように  
もっと足を上げよ!」

片足を上げてバックから突かれるというなんとも恥ずかしいポーズで

アナルをかき回されるケラ子。オレはその光景をオカズに  
ガシユガシユと自身のチンポを擦りきれん

ばかりに扱き倒していた。

「どうじゃ!?これが恥じらいというものじゃ!!」

「あっ♡んひっ♡ゆ…許し…」

「んっ…♡そろそろとどめと行くか…♡」

「い…イクっ…♡あっ…♡あっ…♡」  
ぶっ!! おびいいっ!!

「ひっ♡やあああああっ♡」  
ぶびっ!! ぶびゆううううっ!!

美冷が射精するとほぼ同時にケラ子のチンポからも  
トコロテン射精された。大量の精液が宙を舞った。



「はっ……♡はあぁっ……♡ごめんなさい、ケラ子ホントはお前殿はどうでもよかつたのお♡  
ホントは美冷ちゃんとエッチしたかっただけなの♡」

「えっ？」

「ケラ子ホントは美冷ちゃんのことが好きだからこうやって  
ちよっかいかけてただけなの♡」

「う……ウソをつくでない!!」

「あゝ、そういう事か、好きな子にはちよっかいか出したくなるって奴か」

「ええい!!我が勝ったのだからそのにやけ面を二度と見せる出ないぞ!!」

「シッシツと手を払う動作でケラ子を追い払おうとする美冷。」

「そんなあゝ……」

「……ケラ子ちゃん、ケラ子ちゃんもウチに来ないか？」

「お……お前殿!？」

「もうすでに三人も妖怪を養ってるから二人増えてもどうってことないぞ。」

「それにこの子の気持ちはマジだと思っし」

「……勝手にするがよい」

「だってさ」

「んふふっ、ありがと。お前殿って意外といい人だの。」

「わしも美冷ちゃんからお前殿に乗り換えよっかな？」

「そ、それは許さんぞ!!」

「えへへっ、ウソウソ♡」

「そういつてケラ子は美冷の頬にキスをするのだった……」

激エロ!!雪女対情兮女 完

















